

# 愛媛・別府遺跡

- 1 所在地 愛媛県北条市別府
- 2 調査期間 二〇〇一年(平13) 八月～十二月
- 3 発掘機関 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 4 調査担当者 伊賀上淳
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 古代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(松山北部)

別府遺跡は、東方の高縄山系から西方の斎灘へ流れる河野川と高山川に挟まれた位置に所在し、両河川の浸食・堆積によって形成された扇状地及び扇状地性氾濫原上に立地する。調査区の標高は約二〇～二三mである。調査は1～3区に分割して行ない、木簡は2区から出土した。

2区で検出した遺構としては、掘立柱建物・柵列・土坑・溝・自然流路・井戸

などがある。掘立柱建物は、棟方向をほぼ東西とする二間×一間である。遺物は概ね、一三世紀末から一四世紀前半、一四世紀末から一五世紀前半、一五世紀末から一六世紀前半のものが、遺構及び包含層から出土した。自然流路からは、縄文晩期から古代までの遺物が出土している。

木簡は、井戸SE〇〇一から一点、井戸SE〇〇四から二点出土した。SE〇〇一は素掘りの井戸で、堆積状況から最下部に曲物があったと考えられる。一方、SE〇〇四は石組みの井戸であるが、石組みは一段しか残存していない。最下部には曲物があり、こぶし大の礫が敷き詰められている。その他、木簡は出土しなかったが、井戸SE〇〇二、井戸SE〇〇三を検出している。井戸SE〇〇二は石組みの井戸である。最下部にはこぶし大の礫が敷き詰められている。井戸SE〇〇三も石組みの井戸である。断面の観察から、おそらく最下部に曲物があったと考えられる。

## 8 木簡の釈文・内容

### 井戸SE〇〇四

(1) ・「く」 南無□□用

迷故三界城 悟故十方空

・「く」本来無東西 何処有南北□□

南無□□□□ (210)×26×3 061

(2)



244×38.5×4 061

井戸SEOOI

(3)



(144)×13×2.5 059

(1)(2)は塔婆である。(1)は下部が欠損する。墨痕は一部を除き、表裏ともに明瞭である。頭部には両側から切り込みが入る。

(2)はほぼ完存するが、墨痕は表裏ともに不明瞭である。頭部には両側から切り込みが入る。形状からみて(1)と同様の塔婆であろう。

(3)は上部が欠損する。墨痕は表裏ともに不明瞭である。

# 9 関係文献

〔愛媛県埋蔵文化財調査センター〕『愛比売 平成一三年度年報』(二〇〇二年)

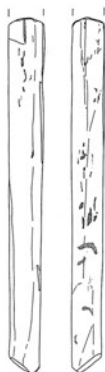
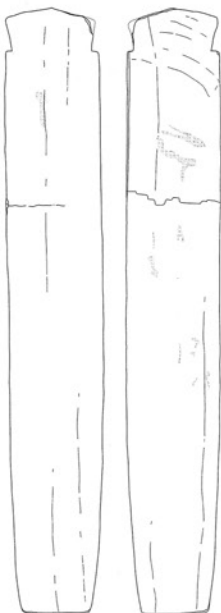
(三好裕之)



(1)



(2)



(3)